

あなたが必要なんです

〜体験版〜

白澤×鬼灯
18禁小説

(中略)

『もしもし、鬼灯さん？ちよつと白澤様の様子がおかしいんですよ・・・時間があつたら、ちよつと来てくれませんか？』

珍しく、桃源郷の桃太郎から着信があつた。

「あいつの様子がおかしいのはいつものことです。私は忙しいので、しばらく行くヒマはありません」

『そ、そんな事言わずに何とかお願いします！白澤様が、鬼灯さんを呼べって言ってるんです・・・』

「は？私を？」

『とにかく来てください、ほんとちよつと普通じゃないんです・・・うわわわわ・・・！』

そこで通話は途切れた。

一体桃太郎の身になにが起こったのか少々心配ではあったが、それよりも白澤に異変が現れたとは、一体どういうことなのだろうか。

遊女から妙な病気でも感染されたか、薬の調合を間違えて、言葉通り変になってしまったのか……いずれにしる、若干は鬼灯の興味を引いた。そういえば、白澤とは長らく会っていない。

とりあえず、今日の就業時間が終わってから、見学に行くのを考えよう、と携帯をふところにしまい、鬼灯は閻魔丁の廊下を歩いた。

それから時間は過ぎ、あつという間に今日の業務は終了になった。鬼灯は自分の執務室に戻り、本日のたまった書類に目を通すべく、椅子に座り、机に向かった。

そしてふと、昼間の桃太郎からの通話をおもいだした。

携帯を取り出してみると、なんと着信が十七件も入っている。

留守電も着信に等しいほど録音されており、そのどれもが桃太郎の自分の来訪を乞う悲鳴だった。しかし、一件だけ、桃太郎ではない声の着信が入っていた。

『鬼灯……ちよつと来て……』

薬屋の主の白澤の声だったが、ひどく暗く、押し殺したような声だった。

普段快活な彼からはかけ離れた陰鬱な声の調子に、これはやはりおかしい、と思い直し、とりあえず火急の書類にだけ目を通し、鬼灯は桃源郷へ向かった。

すっかり夜も更け、桃源郷は月明かりが景色を照らし、あたりには神秘的な絶景が広がっている。この景色を見ながらゆっくり酒でも飲みたいものだが、とりあえず今は、薬屋の極楽満月へ向かわなければならぬ。

顔を上げると、遠目に平屋の一戸建てが見える。これから向かおうとしている薬屋だが、なんだか・

(妙だ)

そう思った瞬間、空気を震わせるほどの轟音が鳴った。

周辺の木で眠っていた鳥や動物たちが一斉に目を覚まし、慌てふためいて周辺を駆け巡っている。

見ると、薬屋から大きな煙があがり、どうやら店が壊されたようだった。

「これは……」

尋常じゃない、と鬼灯は金棒を肩に担ぎ、店舗へと急いだ。

目の前には見えているが、見通しのよいだけで、実は遠い。鬼灯が懸命に駆けていても、薬屋の装用はどんどん形を変えていく。

鬼灯がたどり着いた時には、店は半壊と言って良い状態で、しかも空気を震わせる振動に、地面に響く鳴動まで伴っている。

屋根が吹き飛び、壁が壊され、土煙の中から現れたのは、大きな白い獣の尾だった。

（白澤さん？）

鬼灯がその変容ぶりに驚愕していると、店の中から頭に土塊を被った桃太郎が這い出てきた。

「ああっ！鬼灯さん！来てくれたんですね！」

「桃太郎さん……一体どうしたんですか？」

鬼灯はすっかり腰が抜けている桃太郎に駆け寄り、埃を払ってやりながら問いかける。

「いえ、昨夜からちよつと様子がおかしかったです・・・なんか、いつもの白澤様とは違って、イラしてたというか、落ち着きないというか・・・。いえ、本人は隠してたつもりだったみたいなんですけど、力が余って薬ビン握りつぶしちゃったり、机にぶつかったら、逆に机が壊れちゃったり・・・！」

半泣きの桃太郎がまくし立てている間にも、極楽満月の様子はどんどん変わってゆく。屋根が吹き飛び、瓦が二人の上に振りそそぐ。

「うわああ！」

「大丈夫です、それで？」

逃げようとする桃太郎の首根っこをつかみ、鬼灯は降ってきた瓦を金棒で淡々と躲す。

「ええ、はい、それで、今日になって朝起きたら、もう人の形もまともに出来ないようになって・・・本人は大丈夫って言うんですけど、絶対におかしいんです！そしたら、案の定、なんだか我慢の限界に達ちゃったみたいなのに、いきなり獣化して、そしたらこの有様です・・・！」

必死にまくしたてる桃太郎とは対照的に、鬼灯は至って冷めた目で様子を伺っていた。

「ふん・・・欲求不満ですかね」

「いえ、最近、ちよつとどうかと思うほど女の子と遊び狂ってて・・・欲求不満ってことはないと思いますけど・・・」

桃太郎の言うように、本人は欲求不満というわけではなさそうだ。

言うなればこれは、身体の中で膨れ上がった強大な力を、自分で制御できない、と言った風体だった。これだけ離れた場所にいるのに、常闇の鬼神である鬼灯の身体に、神獣の神気がピリピリと伝わってくるほどだ。

「精力剤でも飲みすぎて、ブチ切れてしまったんでしょうかね」

立ち上がって向かおうとする鬼灯に、危ない、と追いつがる桃太郎だったが、腰が抜けているので簡単に振り払われておいてけぼりをくらう。

「で、でも、最近の薬みてると、わざと自分を弱らせるような薬ばかり調合して飲んでたみたいなんです……」

「それはいつぐらいからですか？」

「えー……と、一週間……ぐらいですかね？あー！、こんな事になるなら、もっと早く鬼灯さんをお呼びおけばよかったですか！」

「私をお呼んだところで、私はアイツの主治医でもなんでもありません。どうにもできませんよ」

桃太郎の言葉に切り返しながら、鬼灯は白澤の様子を眺めていた。

この一週間、自分を抑えるための薬をずっと飲んでいたとは、一体どういうことだ。鬼灯が白澤と最後に会ったのは三か月前。

その時は何の変調もみられなかったが……

「とりあえず、金棒でのしてからお話しましょうか」

「のす前にお話してください！」

と、懇願した桃太郎の顔面に、勢いよくテーブルが吹っ飛んできた。

「がふっ！」

「あ、桃太郎さん」

桃太郎はそのまま吹っ飛び、鼻血を出しながら緩やかな斜面を丸太のように転がっていった。

鬼灯は心底迷惑そうにため息を突き、金棒を振り下ろして、今も破壊され続ける店の中へと向かった。

月明かりが強力なので視界には不自由しないが、店のなかは一層土煙がひどい。

吸い込まないように口に手を当てた瞬間、ムチのようになつた尻尾が襲い掛かり、鬼灯が避ける間も防ぐ間もなく、身体を強かに打たれて吹き飛ばされた。

「っ・・・！」

そのまま壁に激突し、壁にめり込んで家屋の一角を崩してしまふ。

鬼灯の身体は鬼神だけあって、驚異的なほど頑丈にできている。身体の負荷は少々目眩だけで済んだものの、予想外の攻撃をくらってしまった心的ダメージの方が大きかった。

(この・・・いつもはただ、モフモフしてるだけなのに・・・)

自分の身体を打ち、今も荒ぶっている純白の尻尾を睨みつけ、鬼灯が起き上がろうとした。

そのとき、急に家屋の崩れが激しくなり、こちらに向いていた尻尾が急速に向きを変え、土煙から目をかばっていると、いつの間にか獣の顔面がこちらに向きを変えていた。

人間の時は自分と変わらぬ185センチの身丈だが、獣化すると体長三メートルほどの巨大な獣に成り代わる。

もともとこちらが本来の姿で、わざわざ人間の姿をしているのは、女遊びがしたいという下らない理由からだ。

目の端に紅い隈取をした、馬と犬を足したような獣の顔に、額に第三の目が蠢いている。

その下にある二つの眼が、倒れ込んだ鬼灯をじっと見下げていた。

「は……白澤さん、一体どうしたんですか……」

そこまで言つて、鬼灯はようやく気づいた。白澤の目にいつもの理性の光がなく、濁った獰猛な獣の本性しか存在していない。

危険を察知してこの場から離れようとするが、身体に鼻面を押し付けられて起き上がることができない。手にしていた金棒も、吹き飛ばされた時に手放してしまったようだ。

「しつかりしてください、この唐変木……」

鬼灯がその顔面に拳を食らわそうと右手を上げた瞬間、白澤はあろうことか、鼻面を大きく広げた鬼灯の両足の間に押し当ててきた。

意外な行動とその意味に、鬼灯の体へ一瞬寒気が走る。

しかし鬼灯が行動に出るより早く、白澤はその邪な牙をこちらに向けてきた。

「あつ……!」

鬼灯の着流しの裾を噛むと、そのまま勢いよく紙のように引きちぎり、下の紅い長襦袢を頭にした。

「ば、馬鹿っ！この、無理ですっ！やめなさい！」

獣の意図がわかると、鬼灯は羞恥と怒りで眉をつり上がらせた。

白澤がさらに長襦袢を牙で引っ掛けて引きちぎろうとしたが、鬼灯が怪力でその頭を押さえ込んで白澤の行動をとめる。

しかし、純白の獣は自分の欲望を抑えきれず、無碍に求める身体へ向かって身を進めるだけだ。

「ううっ！この、正気に戻れっ・・・！」

ぐい、と渾身の力をつかってたてがみを鷲掴み、神獣の顔を上に反らせて、鼻面を体から反らせる。

そしてその瞬間、フワフワした腹毛の下、獣の下腹部に凶悪なものを見つけてしまい、鬼灯は思わず目を反らせた。

（な、なんてグログロしい・・・）

神獣の一物が、充血しきって赤黒くそそり立っている。

身体を交わすときは人型をしていて、大きさも人並みだ。しかし、今日の前に現れているものは正に「馬並み」という言葉が当てはまるほどの強烈な存在感を持ったものだった。

しかもそのいきり立ちの方向は、ゾツとすることに自分にむけられていられない。

無理やり上に捻じ曲げた白澤の鼻息が頭にかかり、その荒ぶり具合が痛いほど伝わってくる。

鬼灯の腕からのがれようと頭を振り乱し、体もしきりに揺り動かしていると、凶悪な一物の先端から欲望の飛沫があがり、鬼灯の下腹部に降り注いでくる。

「き、汚いですっ・・・！」

しかし、両手は白澤の頭を押さえ、身体はほぼ、のし掛かられた

状態で起き上がることができず、避けることも動くこともできない。

白澤の胴体にある六つの目がぎよろりと動き、鬼灯を視界に捉えた。鬼灯もそれに気づいたが、気づいていながら動くことができない。

(よからぬことを考えてますね・・・)

嫌な予感は的中する。

白澤は鬼灯の両脇で踏ん張っていた前足を動かさず、胴体の目で見ながら鬼灯の身体を踏みつけた。

「うぐっ……！」

どん、と衝撃が身体に走り、一瞬息が止まる。鬼灯の腕の力が一瞬緩むと、その隙を狙って白澤は腕を振り切り、再び鼻面を身体に押し当ててきた。

「ごほっ……、ちよつと、落ち着きなさい！」

獣の荒い息遣いを顔に感じたかと思うと、首元に顔を押し当てられ、そのまま襟に潜り込まれて着物の合わせ目を激しく乱される。

「んんんっ！」

白澤の体が直接肌に触れたことで、鬼灯の身体にピリピリとした衝撃が走る。闇の鬼神である鬼灯に、獣人化した白澤の神気は強烈すぎた。

人間の姿をして交わるときは神気の量を調整しながら抱いてくれるが、今の白澤にはとてもそんな余裕はなさそうだ。

純白の体毛が直接肌に触れただけで、ここまで感じてしまうとは、鬼灯の想像を超えていた。

(こんな状態で犯されたら、体が動かなくなってしまう・・・)

先程から、獣の荒れ猛る箇所が淫らな液を何度も零し、両足を大きく開いた鬼灯の下半身にベタベタと降りかかる。

体毛だけでなく体液もふんだんに神気を孕んでいて、しかも直接的な性の印だけあって、効果はいやでも淫靡な方向へと向かってしまう。

長襦袢を通して、布に染みた体液が鬼灯の身体の芯を疼かせ、意志とは反対に心をざわつかせてしまう。

それに、このむせ返るような性の芳香。

それは一気に、白澤との常時を思い起こさせる即効的な媚薬でもあった。

鬼灯のわずかな変化を察知したらしく、純白の獣は鼻面をさらに胸元に押し付け、強引に開襟を開いて白い上半身を半ばまで頤にさせた。

屋根のなくなった家屋で、青白い月光を受けて鬼灯のきめ細やかな諸肌が溢れ出す。それは壊れた壁の土塊にまみれていても、美しかった。

「んぐっ・・・！うう、やめなさい！」

鬼灯の言葉など耳に入っておらぬ様子で、神獣はそのまま滑らかな肌を大きな舌で縦横無尽に舐め回した。

「ふあっ！あ、このっ・・・調子に、乗るな・・・」

舌の唾液を通して強力な神気が鬼灯の身体に流れ込み、鬼灯の抵抗心を徐々に奪ってゆく。顔を反らせようと力を込めていた腕が徐々に抵抗の意思を失い、ただ獣の頭に両手を添えるだけとなってしまっている。

神獣の熱くヌメった、ときおり舌の糜爛が伝えるザラザラとした感触に、鬼灯の身体の芯が燃え上がってくる。

(いけない、このまま流される・・・)

白澤の大きな舌が肌の上を滑るたびに、ゾクゾクと官能がわきあがってくる。明らかな性の香りに、全開まで放出された刺激的すぎる神気も伴って、鬼灯の身体は急速に発情しはじめていた。

「んん、はあ、な、舐めるな・・・っうう・・・」

しかし、チラと視線を下へ落とすと、凶悪な獣の一物が確実に自分を狙っていきり立っている。獣は腰を落とし、鬼灯の身体にそれを擦り付けるようなイヤラシイ動きまでするようになっていた。

(欲求不満・・・ではないはずですが・・・)

フラれまくって情交まで至っていないのか？そのストレスが爆発して・・・と、そこまで考えたが、この男は金を払ってでも遊女を買い、簡単に抱く。

一体何故こんな事態になったのか皆目検討もつかないが、とりあえず今の自分には、明確な危機が迫っていた。

(あ、あんなモノ、身体に入れられたら体がおかしくなってしまう)

しかし、暴力で相手を昏倒させようにも、鬼灯の体はすっかり淫気に毒されて力を失い、今も無様に上半身を舐め回されて感じてしまっている状態だ。

このままでは、遠からずこれを身体に受け入れさせられてしまう。

そこで鬼灯は決心した。

上半身を舐める白澤の舌を振り切って屈み、神獣の腹の下にもぐりこんで、いきり立つ凶物と対峙した。

改めて目の前でみて、その圧倒的な存在感に鬼灯の喉が鳴る。

カリ首は赤く充血して凶悪に張り出し、離れていてもドクドクとした脈動が聞こえそうな茎の表面には、太く逞しい血管がはち切れんばかりに浮き上がっている。

鬼灯はその凶悪さに一瞬躊躇したが、白澤が身を進め、鬼灯の白い頬に先端を押し当ててくる。先走りの淫液で顔をベトベトにされて、決心がついた。

鬼灯のたおやかな手が脈動する茎に添えられ、ゆっくりと上下に擦り始める。

神獣はそれに相当な悦びを覚えたらしく、興奮の鼻息を荒くし、さらに鬼灯の目の前に下半身を突き出した。

(中略)

「ん？抜いてほしい？」

意地が悪そうな声で目の前の耳に舌を這わせ、鬼灯の快感を煽る。

「んはあっ・・・あっ・・・ああ・・・」

耳で快感を感じ、身体を身悶えさせると、体内に在る白澤の熱に擦れて、たまらない愉悦が全身に走る。白い肌を痙攣させている鬼灯に、白澤はさらに背後から手を伸ばして両胸の突起を指で弄び、神気で散々に翻弄するものだからたまらない。

二人が折り重なる姿勢で交わり始めてから、一時間にはなるだろうか。鬼灯は目の前の快感を感じるのに精いっぱい、正確な時間の感覚は麻痺している。

激しく動かされたり、今されているようにジリジリと快感であぶられたりを何度か繰り返され、散々絶頂を迎えさせられて、今に至る。

しかし、許されているのは後悦での絶頂だけで、自身へは射精できないように加虐的な戒めをされていた。

いつもの鬼灯なら、こんなアブノーマルな行為など断固として拒むところだが、白澤から流される想像以上の神気と快感に手も足も出せず、ただされるがままになってしまっている。

(うああっ・・・頭が、おかしく、なりそっ・・・)

全身が絶えず性の愉悦に包まれ続けながら、狂おしいほどの射精の欲求に苛まれ、さしもの鬼灯も音を上げ始めていた。

しかし、原因の主である白澤はケロリとしたもので、散々鬼灯の身体を弄び続けている。

「ほら、胸でイッて・・・そしたら、今度こそ抜いてあげるから・・・」

後ろから白澤の指がうつぶせの鬼灯の胸に伸び、充血しきって絶妙に敏感になった突起に触れる。

「んんっ！はあ、ああっ！あっ！あああっ！やつ・・・うあ、あああっ！はぐっ・・・んん、あああ・・・」
胸への電撃のような快感が白い背中を大きく反り返らせ、動いた身体は白澤の熱を締め付けてさらに快感を突き付けられる。
動くとき余計に快感を感じてしまうのだが、今の鬼灯には、身体を愛撫されて動くなと言われるなど、実に無理な状態だった。

白澤の長い人差し指が突起の先端をこね回し、神気が性感帯から注ぎ込まれてゆく。硬くなった突起の感触を指先で散々楽しみ、二指を使って時折軽く挟む。

「ああっ！はああ・・・や、め・・・」

ビクンと反り返って反応したところを、爪で引っかかれてさらに鋭い快感を打ちこまれ、切ない気分がどンドン身体を駆け上がってゆく。

指の動きが早くなり、カリカリと引っ搔く爪の硬い感触が、一搔きごとに頭の快感神経を爪弾きつづける。

上半身の快感に耐えきれず、身体全身が逃げを打とうとするが、身体に覆いかぶさっている白澤がそれを許さない。何より、身体の深い部分に穿たれた灼熱の塊が、鬼灯の動きを自由にさせなかった。

(いくっ・・・イキそう、あああ・・・も、だめ・・・！)

まるで鬼灯が感じる快感を把握しているかのように、絶妙のタイミングで白澤の指が突起を強くつねった。

その瞬間、ぶわあ・・・と上半身に絶頂の熱が広がり、鬼灯の意識を快感一色に染めてゆく。

「うううっ・・・！はあ・・・っあっ、あっ、あっ・・・！！」

指先にまで広がる絶頂の愉悦に、鬼灯は身体の上の白澤を跳ね除けんばかりに背筋を反らせ、同時に下半身の熱も強く締め付けて自ら灼熱の快感を味わってしまう。

強力すぎる快感に鬼灯の瞳から涙が流れ、突き出して唇の上に乗せられた舌が興奮の唾液を口端に垂らす。

「んっ・・・イッたみたいだね、鬼灯。でも、まだまだイケるでしょ？」

鬼灯が絶頂したことで締め付けられる自分の快感源にため息をつきながら、白澤が首筋に口づけし、さらに鬼灯を追い詰める言葉をつぶやく。

「あつ！あつ！やつ・・・！はああつ！イク、イク、ああああ！あつ！ああああつ・・・！」

あの鬼灯が強要もなく「イク」などと自らの快感を訴える言葉を吐くなど、彼を知る者ならば自らの耳とその人物を疑っただろう。

たった一時間程度の交わりで、その変貌ぶりは、清廉な淑女が快感を欲っして腰を動かす淫婦になってしまったかのような変わりようだった。

「ああつ！やつ・・・うんっ、んぐっ・・・あ、ああ・・・」

白澤に絶頂中の突起を弄られるたびに、次々と新たな絶頂が押し寄せ、快感を貪ることしか考えられなくなってしまう。

上半身の快感は身体全体に伝達し、最も熱を感じている体内にも影響し、無意識に何度も白澤を締め付け、密かに彼を悦ばせていた。

「んっ・・・ああ・・・うあ・・・はああ・・・」

何度か鬼灯を絶頂の高みへと突き上げ、愛撫を緩め、ゆっくりと激悦を収めてゆく。鬼灯の身体が感じるタイミングを全て把握しているかのように、あくまでゆるりとした快感が続くように、しかし絶頂しないように絶妙な調子で突起を優しく乗り続ける。

「んっ・・・う・・・うう・・・」

絶頂の緊張で強張らせていた身体を弛緩させ、愉悦のため息を漏らす。その鬼灯の表情は淫らで美しく、普段の彼からは想像もつかない快楽に浸った顔だった。その横顔に何度も口づけし、舌を這わせ、耳朶を甘く噛みながら白澤が囁く。

「ふふっ・・・お疲れ様。ちゃんと胸でいったから、約束通り抜いてあげる」

後ろから鬼灯をがっしりと抱きしめ、腰の動きだけで下半身を持ち上げ、鬼灯の中に突き入れた熱をゆっくりと抜き出してゆく。

「あっ・・・はああ・・・っ・・・あっ・・・あっ・・・」

(ゆ、ゆつくり抜くなっ・・・余計に感じて・・・)

動くたびに締め付けが強くなる鬼灯の身体を愉しみながら、白澤がさらに深い笑みを浮かべる。

ちゅ・・・と淫らな音が響き、ようやく鬼灯の身体から白澤の一部が出てゆき、快感に支配されていた身体が解放される。

「ううっ・・・はあっ、はあ、はあ・・・」

(や、やっと解放されましたね・・・でも、身体中が痺れて動きません・・・)

身体中を汗で濡らした鬼灯とは対照的に、白澤は汗の一滴もかかず、前髪が少し乱れているだけで疲労の気配は全くない。

鬼灯の白い肌の上を流れる匂い立つ汗を舌で舐め続け、鬼神の精気を飲み込んでゆく。

耳、首、背中と、背面には余すところなく白澤の舌が滑り踊る。

立て続けに流し込まれている神気のせいで、全身が性感帯のように敏感になっている鬼灯にとっては、身体を疼かせるのに十分な愛撫だった。

「んあ・・・はあ・・・ああっ・・・」

ほどよい快感に鬼灯の口から色づいた吐息が零れ落ちる。一通り汗を舐めとった白澤は、上半身を起こし、未だに滾ったままの姿をしている自身を手に取り、鬼灯の秘孔へと押し当てた。

「うあっ・・・！も、もう、挿れるのはっ・・・抜くと言ったでしょうっ・・・」

「なんで？言われた通りちゃんと抜いたよ？だから、今度は挿れるんだよ・・・」

「ふぐっ・・・ううう・・・っ！」

白澤の長い指が臀部の谷間に滑り込み、入り口に指を添えて上下に擦り、入り口を刺激する。そこはすでに、先ほどまで雄の器官を銜え込んでいたとは思えないほどの窄まりを見せていたが、互いの淫液で濡れそぼっていた。

「ふふ、本当に綺麗なお尻だね・・・きめが細かくて、熱くて、触り心地も最高・・・」

鬼灯の身体を賛美しながら、秘孔に指を軽く突き入れたり、双丘を撫で回したり、白澤は他愛無い悪戯を繰り返している。

しかし、鬼灯にとっては十分すぎる刺激だ。白澤の身体からは未だに瑞々しい神気が放出され続け、それをまとった指で肌にふれられるのは、相反する気質を持つ鬼灯にとっては強烈な刺激になるのだ。

「んううっ・・・！やたらと、触らないで・・・」

「じゃあ、挿れるね」

「あっ・・・！！」

熱く猛り続ける白澤の先端が秘孔に押し当てられ、濡れた音と圧倒的な圧迫感、神気の熱刺激と共に、一気に奥までを貫いた。

「ああああっ！・・・くううっ！いい、挿れるなっ・・・ふあ、あああっ！あっ！あ、あ、ああっ！」

再び身体に駆け巡る愉悅の痺れと衝撃に、鬼灯が甘いよがり声を漏らし、手元のシーツを握りしめる。

「あぁっ・・・あっ・・・！うぁっ・・・あぁ・・・」

「挿れただけでイっちゃった？肌がピリピリしてるから、すぐにわかるよ・・・悪いけど、ちよつと激しくいくね。僕がイクまで、動くから・・・」

「っ！あ、あぁ、ま、待ってくださっ・・・！あぁっ！んぐううっ！あっ！あっ！あぁぁ・・・っ！」

白澤の腰が引き上げられ、一気に挿しこまれた猛りが再び一気に引き抜かれる。しかし、間をおかずに再び根元まで鬼灯の中へと入ってゆく。

「あぁっ！あっ！あっ！あぐっ！うううっ！はぁぁ・・・っ！と、止め・・・！んぐっ・・・！あぁぁっ！あ！あぁぁっ！」

強烈すぎる快感刺激の連続に、鬼灯が泣き声のような嬌声を遠慮なく張り上げ続ける。腰は白澤の両手で上から強固に押さえつけられ、逃れることはできない。

「鬼灯、気持ちいいよ……。鬼灯もいいよね？」

激しい動きにかかわらず、汗ひとつかかない涼しい白澤とは対照的に、鬼灯は全身を薄桃に染めて汗を飛び散らせながら上半身を悶えさせている。

(中略)

自分がしでかした結果を目の当たりにして、白澤はその色香に熱くなる身体を押さえて、傍らにしゃがみ込んで紅潮した顔を覗き込む。

「おい、大丈夫？」

頬に手を当てこちらを向かせるが、鬼灯は目を硬く瞑って未だ身体の中を暴れ回る快感に耐えている。

「ううつ・・・うつ・・・うつ・・・ば・・・か・・・つ」

それでも目の前の白澤を罵ることをやめないのは、強靱な精神力の鬼灯だからできる芸当だった。

身体の中で渦巻く精液が洞内での絶頂をとどめ、自身からは閉め忘れた蛇口のように精液がこぼれ続けている。

身体の下に敷いたバスタオルに零れ落ち、布に沁みて暗い色が広がってゆく。

その精液の垂れ流される様をみて、白澤が密かに生唾を飲み込み、しかしそれを気取られず、鬼灯に顔を近づける。

「鬼灯、辛い？」

「うっ……んんっ……は……い……」

「じゃあ、神気抜こうか」

明るめの声で白澤は言う、鬼灯自身を片手で握った。

「はあああ……！」

外的刺激を受け、勢いづいた射精と共に、鬼灯の甘い声が響く。

先ほどから精液をこぼし続ける鈴口に指をあてると、白澤は神気の塊を指先に集中させた。

「っ！うあああっ！なに、すっ……！やめ……はあ、はあ……！」

熱の塊のような神気が鈴口に置かれ、細い管を遮り、ピタリと鬼灯の射精を止めた。

「あああつ！とつて！やめてくださいっ！辛い・・・！ああああ・・・っ！」

ヒクヒクと鬼灯の腰が身もだえし、圧倒的な射精感を遮られた苦しさとしれったさに、彼らしからぬ哀願を見せる。

「垂れ流すなんて、もったいないだろ・・・。それじゃ、今度は吐き出そうか・・・」

舌なめずりをし、白澤は仰向けの鬼灯の下腹に手を当てる。

「うあつ！？何を・・・！」

鬼灯の戸惑いをよそに、白澤が若干ふくらみを帯びた引き締まった下腹に力を込める。

「あああつ！やめ、止めてくださいっ！触るなっ！ああああつ！」

暴れる両足首を、膝を立てた状態で拘束し、再び身体の自由を奪う。両手を拘束する必要はなかった。上体をあげれば下半身の中の精液が激しく流動し、強烈な絶頂を迎えてしまうからだ。

「これだけたくさん神気をのみこんじゃったら、お前辛いだろ・・・だから、ちゃんと吐き出さないと。ずっとこのままだよ？」

「あうっ・・・ううっ・・・やめ・・・！」

下腹に置いた手で腰を揺さぶられるだけで、後悦の絶頂が訪れる。その鮮烈さに、鬼灯の意識が再び妄となり、これから施される痴態の始まりに気もそぞろになってしまう。

「じゃあ、上から抑えるから、出すんだよ・・・ちゃんとタオル敷いてるから、汚れる心配はしないでね」

そう言うと、白澤は下腹に乗せた片手に力を込め、軽く膨らんだ部分を押しした。

「ああああっ！そ、んっな・・・問題・・・じゃ・・・なっい・・・！くううっ！」

鬼灯は額から汗を流し、白澤の与えてくる圧に耐えていた。人の目の前、しかも白澤の目の前でそんな醜態をさらすなど、絶対にできない。いや、許されない。

しかし必死で耐える鬼灯とは裏腹に、白澤は当然余裕の表情だ。鬼灯は弾け続ける後悦絶頂の連続に晒され、強烈な射精欲求と、排出の愉悦を堪えるという、気も狂わん状態だ。

打って変わって白澤は、身体の中を未だに渦巻き続ける激しい神気の奔流を耐えるだけだ。鬼灯に比べれば、針に刺された程度の痛みをこらえるのと、刃で袈裟懸けに斬られて傷口に塩を塗りたくられるのを耐えるほどの差がある。

しかし、白澤はもう一つの事も耐えなければならなかった。

「んんっ、くうう、あ、はあう・・・んっ！あぐううっ・・・！」

薄桃に紅潮させた白い肌を汗まみれにして、鬼灯が蕩けたうめき声を上げる。

白澤は下腹部に乗せた手を一瞬浮かせ、そのまま軽く打ちおろした。

「んぐううっ！」

小気味よい炸裂音が鳴り響き、軽く叩いた衝撃で鬼灯の中の神気が揺らぎ、絶頂がやってくる。

「ほらほら、早く出さないと、これ続けるよ？」

そう言いながら、容赦なく連続して、白い鬼灯の下腹を打ちまくる。

「はぐっ！あああっ！あっ！あっ！あああっ！だめ……！こ、こんなっ……！」

（こんな仕打ち、許せませんっ……！）

下腹を自由勝手に叩かれているというのに、鬼灯は絶頂快感に痺れて何も抵抗することができない。動くだけで絶頂するのだから、外部から打撃という刺激的な接触を受ければ、その快感は倍増する。しかも白澤の力加減は絶妙で、鬼灯が激しい痛みを感じない程度に、息苦しくならない程度にとどめ、体内の精液をうまく揺らして刺激し、絶頂だけを与えてくるのだ。

「はあ、はあ、はあ、はあああ……っ！」

時間にして一分ほどだっただろうか。白澤の手が動きを止め、白い下腹は若干赤く染まっている。鬼灯の表情は連続絶頂に蕩け、眉はハの字に、紅い唇の端からは喜悦の唾液がこぼれている。

両足を痙攣させ、上半身を汗まみれにして、床に敷かれたバスタオルを掴み、激感に耐えている。

「ほらほら、出さないと大変なことになるし、このままだと終わらないよ？」

「くっ……どの口が……言うかつ……！」

ギリギリと噛みしめて耐えていた奥歯の間から、絞る様に反抗的な言葉を投げかける。

「はあ、まだまだ観念しそうにないね……」

そうため息をつくくと、白澤は再び打擲を繰り出した。今度は若干強め、炸裂音が部屋に響くほど、それは大きかった。

「ふあっ！ああああああ！」

鬼灯の背中が弓なりに反りかえり、それでも絶頂を迎え、一瞬で二度果ててしまう。これほどの快感を感じてしまっているのは、当然射精も止まらないはずだが、今は白澤のせいで栓をされ、出せない苦しみと疼きに悶絶までしている。

「ほらほら、恥ずかしくないから、出しちゃえ出しちゃえ」

「んぐっ！はあっ！ああああっ！いやだっ！ああっ！ふああああっ！」

連続して強烈な打ちこみを繰り返され、鬼灯の上半身が激しくのた打ち回り、壮絶な快感に汗を飛び散らせる。

「出したら、出させてあげるよ？それでもダメかな？」

下腹を打ち続けながら、射精を禁じられた鬼灯自身を片手で上下に激しく抜く。

「うあああああっ！やめ、はあああっ！も、耐えられっ・・・ああ、イキたいっ！」

あの鬼灯の口から自ら快楽を求める声が出ようとは、これまでの情事を知らない者が聞いたら耳を疑っただろう。

しかし、今の鬼灯は淫楽におぼれた凄艶な一人の鬼だった。美しく、被虐的で、相手の劣情をそそってたまらない、色香の塊だった。

(熱いっ・・・！体内が燃える、灼けてしまうっ・・・！煮えたぎっているようだ！あああっ！またイクっ・・・！意識が・・・一体、いつになったら・・・！！)

失神しかけた鬼灯の意識を、白澤の激しい打擲が無理矢理覚醒を促す。

「あぐうううんんっ！」

一気に目をさまし、再び下腹に力を込め、こぼれようとした精液を必死でとどめる。
気を失ってしまったら、間違いなく醜態をさらしてしまう。

(意識を、しっかりもたないと・・・！)

しかし、鬼灯の保有する闇の性質を持つ身体は、相反する神気を追い出そうと躍起になってる。これまでは射精と発汗いう手段で少しづつ昇華していたものを、一方をせき止められ、汗の流れだけでは全く事足りず、身体が一刻も早く、もう一つの出口から神気のかたまりを吐き出そうと蠕動していた。

「ふああ・・・も・・・やめ・・・て・・・」

日ごろの鬼灯からは考えられない、しおらしく、甘い声が紡ぎだされる。紅くなってしまった下腹の滑らかな肌を白澤が撫でさするが、それだけでも絶対的な快感が押し寄せてくる。

「出したら止めてあげるよ。そして、こっちもまた、腰が抜けるほどイカせてあげるね」

続きは本編でお楽しみ下さい。